

母性が人類を救う

国立京都病院整形外科医長 石田勝正

助産婦の皆さん、お久しぶりでございます。先天股脱発生予防の全国啓蒙運動を始めましたのが昭和50年4月。かれこれ15年の歳月が流れました。その折には助産婦、保健婦の皆様の絶大な御協力をいただき感謝しております。お蔭でその発生が激減し、今では稀にしかみない疾患になりました。

ところで今日は、母性が人類の存続にとって不可欠なものだということを、脳の仕組の面から話してみたいと思います。

蟻や蜂などは本能だけで一生を過ごせるように脳がつくられています。が、人間は本能で生きる部分は少なく、主に過去の体験の記憶に問い合わせながらその場その場の状況を判断して生きてゆくように脳がつけられるのです。その方が環境の複雑な変化に順応できるからです。これを脳の“問い合わせ判断機構”と名づけました。

この脳の判断機構にとって一番大切なものになるものが、胎内や出生直後に母親と関わり合った日々の体験の記憶です。その時のことを憶えている人はいないので潜在記憶と呼ばれていますが、脳にはしっかりと記憶されています。これが“安心と快さ”の原体験の記憶であり、“愛”の原型にもなるのです。

生まれて直後抱いてあやしてもらおうと、その母親の声やぬくもりや軟かさなどが胎内での生活に似ているので“安心で快い”と判断され、それを記憶します。

新生児や乳児の時に抱きぐせがつくほどに抱

かれた赤ちゃんは精神発達も順調で自立も早いと指摘する識者が少なくありません。そのわけは“愛されている自分”ということでこの世に存在している自分を赤ちゃんが認識でき、この自己認識が自我の発達のもとになるからです。

この愛されている自分の記憶を核にして人や物との安心で快い関わり合いの世界を一步ずつ広げてゆくことができ、愛情豊かで健全な人格や性格がつくられてゆくのです。初期の赤ちゃんを抱いてあやすことはあまやかではなく、人が生きてゆくのに必要なことなのです。

そればかりではありません。生まれてすぐの赤ちゃんを添い寝でもよいから抱いてあやすという行動によって、母親は母性を豊かに育まねばなりません。そのためには産後1週間が最も大切な時で、お産で疲れたなどと母親は言うてはおれないのです。

母性こそ人類の宝です。“母性本能”が希薄になったり、なくなったりしては大変です。潜在記憶から“愛”の原体験の記憶が無い赤ちゃんの将来を考えただけでぞっとするではありませんか。しかし現実はそのぞっとする方向に向かっています。新生児室による母子の早期分離は赤ちゃんの将来の心にも母性にも危険です。早期母子分離の結果、心の荒廃が文明国を覆っています。今こそそのことに思いをいたし、早期に母子の絆を絶つことの誤りを正さなければ、人類社会は心の内面から崩壊することになるでしょう。

母子同室を自信をもって推進して下さい。